

サクセスフルエイジング

古谷野 亘

聖学院大学

第 52 回日本老年社会科学大会教育講演, 2010.6.

幸福に老いるための条件を明らかにすることは社会老年学に課された究極の課題である。社会老年学においては **successful aging** (幸福な老い) の定義をめぐる抽象的な議論に代えて、モラルや生活満足度などの操作的概念 (主観的幸福感) を用いて幸福な老いの程度を測定し、幸福な老いの関連要因を探るという方法で研究が進められてきた。

これまでに広く用いられてきた主観的幸福感の測定尺度は、主観的幸福感を多次元の構成概念としてとらえ、その指標として 1 次元の得点を与えるように設計された尺度である。幸福な老いの測定に関する研究は、理論的に措定された次元を得点に適切に反映させるという測定技術の問題を中心に進められ、因子分析や共分散構造分析などの手法によって、どのような次元が抽出されるかが検討されてきた。

主観的幸福感の関連要因に関する研究は、活動理論と離脱理論の論争の過程で始められ、その後、多変量解析により関連要因の影響を明らかにする要因分析に移っていった。要因分析の結果は対象集団の違いにもかかわらずほぼ一定しており、日本の高齢者については、健康度と社会経済的地位、家族 (配偶者と子ども) の 3 つが主観的幸福感に有意な影響を及ぼす要因として一貫して報告されている。家族以外の他者との関係は、対象と測定方法により、有意な関連を示す時と示さない時がある。

主観的幸福感は、社会老年学においてもっとも熱心に研究されてきたテーマでのひとつであるが、研究の中心は測定法の開発や改良にあり、関連要因の分析は低調であった。その背景

には、さまざまな集団でほぼ同一の結果が得られ、しかもそれが自明の事実であったことがある。しかし、主観的幸福感の分散のうち関連要因によって説明できている部分は多くても 3 割程度にすぎず、残りの大部分は説明されない残差として残されている。これは、幸福な老いの条件について未解明の部分が大きいことを意味する。

これまでに明らかにされてきた主観的幸福感の関連要因は、いずれも幸福感の低下を防止する要因であって、幸福感の高揚をもたらす要因ではないと考えられる。人を不幸にする要因が多くの人に共通であるのに対して、幸福にする要因には個人差が大きいため、2 次の相関ないし回帰関係から幸福感の高揚をもたらす要因を析出するのは困難である。生活諸条件と主観的幸福感の関係を調節する要因の解明は、主観的幸福感を高め、幸福に老いるための条件を明らかにすることにつながる可能性がある。また、これまで必ずしも十分慎重に行われてきたとは言いがたい関連要因の選択と、その測定法の開発が、幸福に老いるための条件の解明に資するであろう。

そして、主観的幸福感を幸福な老いの指標として行われてきた従来の計量的アプローチの適否と限界についても、あらためて検討されるべき時にきていると考えられる。現在の長寿高齢社会においてサクセスフルエイジングとは何であり、その実現のために何が必要であるかを考えることが、社会老年学の研究者に求められている。

教育講演

サクセスフルエイジング

古谷野 亘 (聖学院大学)

1. サクセスフルエイジングの研究

社会老年学の究極の課題

1. サクセスフルエイジングの研究

社会老年学の究極の課題
加齢にともなう生活変化への適応の問題

人生の節目

生活の再編

生活変化への適応

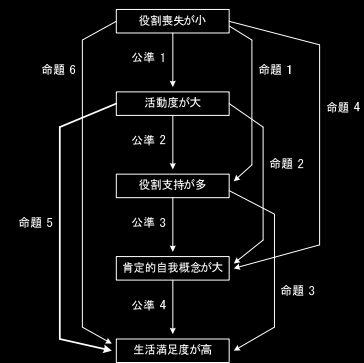
1. サクセスフルエイジングの研究

社会老年学の究極の課題

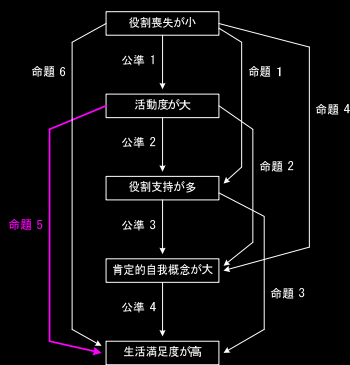
加齢にともなう生活変化への適応の問題

職業生活からの引退と社会的活動 — 活動理論

活動理論の体系



活動理論の体系



活動理論の検証



2. 主観的幸福感の測定

被説明変数の測定

主な主観的幸福感の測定尺度

Cavan, et al. (1949)	Attitude Inventory	55 items
Kutner, et al. (1956)	Kutner Morale Scale	7
Neugarten, et al. (1961)	Life Satisfaction Index A	20
Adams (1969)	(revision)	18
Wood, et al. (1969)	Life Satisfaction Index Z	13
Lawton (1972)	PGC Morale Scale	22
Lawton (1975)	Revised PGC Morale Scale	17
Liang & Bollen (1983)	(revision)	15
古谷野 (1983)	生活満足度尺度 K	9

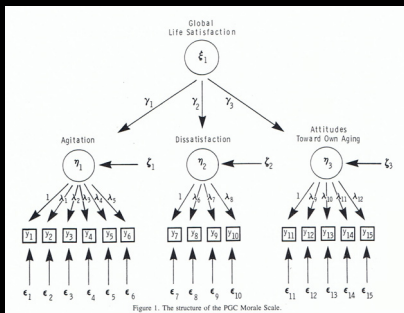
主な主観的幸福感の測定尺度

Cavan, et al. (1949)	Attitude Inventory	55 items
Kutner, et al. (1956)	Kutner Morale Scale	7
Neugarten, et al. (1961)	Life Satisfaction Index A	20
Adams (1969)	(revision)	18
Wood, et al. (1969)	Life Satisfaction Index Z	13
Lawton (1972)	PGC Morale Scale	22
Lawton (1975)	Revised PGC Morale Scale	17
Liang & Bollen (1983)	(revision)	15
古谷野 (1983)	生活満足度尺度 K	9

2. 主観的幸福感の測定

被説明変数の測定
最新の計量的手法の適用

PGCモラル・スケールの構造



Liang & Bollen (1983)

2. 主観的幸福感の測定

被説明変数の測定
最新の計量的手法の適用
尺度の類似性と主観的幸福感の概念

Subjective Well-being

positive-negative affective dimension
exclusively relying on survey self-assessments reported by subjects

||

主観的幸福感

Subjective Well-being

positive-negative affective dimension
exclusively relying on survey self-assessments reported by subjects

|| ?

主観的幸福感

2. 主観的幸福感の測定

被説明変数の測定

最新の計量的手法の適用

尺度の類似性と主観的幸福感の概念

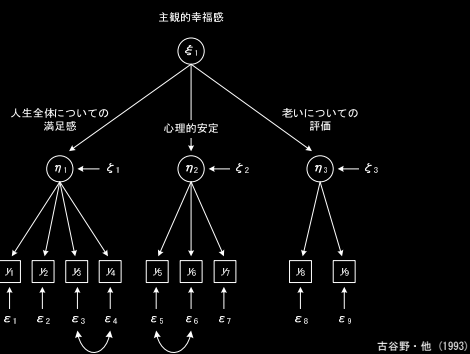
主観的幸福感の共通次元と LSIK

PGCモラル・スケール、生活満足度尺度A の下位次元の分類

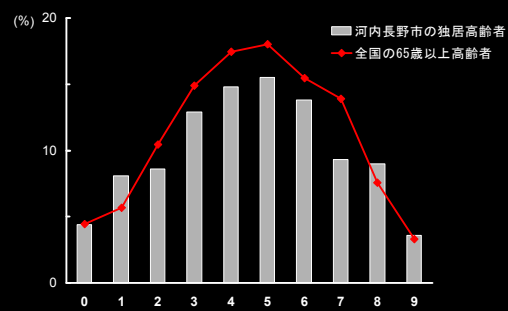
	短期	長期
認知	老いについての態度 (PGC)	一致 (LSIA)
感情	心理的動揺 (PGC) 不満足感 (PGC) 気分 (LSIA) 生活への熱意 (LSIA)	

古谷野 (1989)

生活満足度尺度Kの構造



生活満足度尺度Kの得点分布



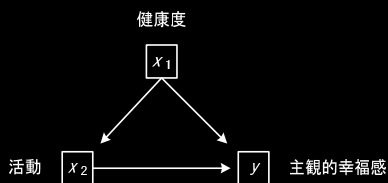
3. 主観的幸福感の関連要因

相関分析から多変量の要因分析へ

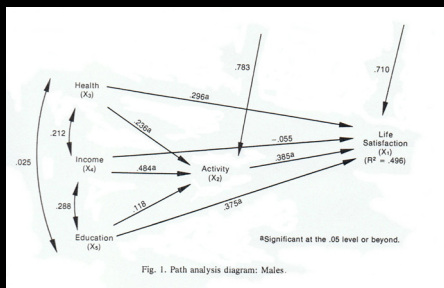
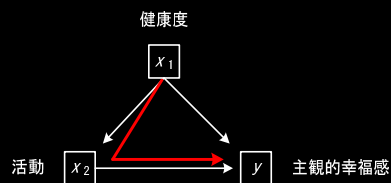
活動理論の検証



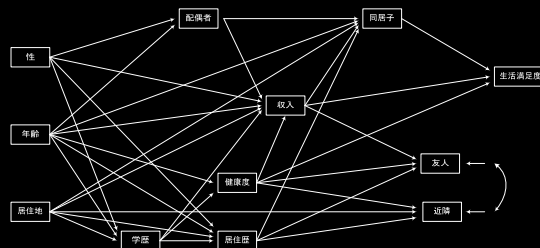
主観的幸福感の要因分析



主観的幸福感の要因分析



Markides & Martin (1979)



対象は全国の65歳以上の在宅高齢者 (n=1510).
 $\chi^2 = 57.26$, $df = 31$, $\chi^2 / df = 1.52$, $GF1 = .994$, $AGFI = .984$, $CN = 1180.3$.

古谷野 (1993)

3. 主観的幸福感の関連要因

相関分析から多変量の要因分析へ
 主観的幸福感の要因分析の結果はほぼ一定

主観的幸福感と生活条件との関連 (r)

健康度、身体的障害の程度	.2 ~ .4
社会経済的地位	.1 ~ .3
年齢	.0 ~ .1
人種	.0 ~ .1
性	.0 ~ .1
職業の有無	.0 ~ .1
配偶者の有無	.1 ~ .2
交通の便	.1 ~ .2
住宅	.1 ~ .2
社会的活動	.1 ~ .3

Larson (1978)

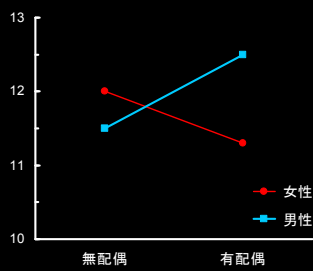
3. 主観的幸福感の関連要因

相関分析から多変量の要因分析へ
主観的幸福感の要因分析の結果はほぼ一定
→ つまらない

3. 主観的幸福感の関連要因

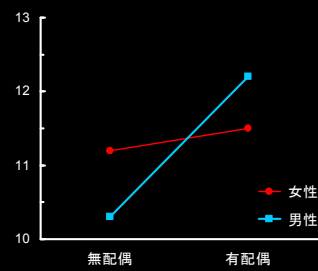
相関分析から多変量の要因分析へ
主観的幸福感の要因分析の結果はほぼ一定
→ つまらない
→ つまる研究だってある

配偶者の有無とモラル



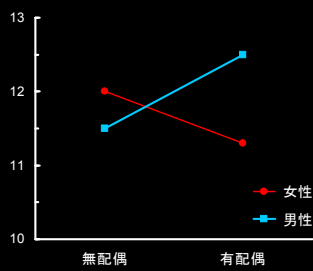
吉谷野 (1992)

配偶者の有無とモラル



吉谷野 (1992)

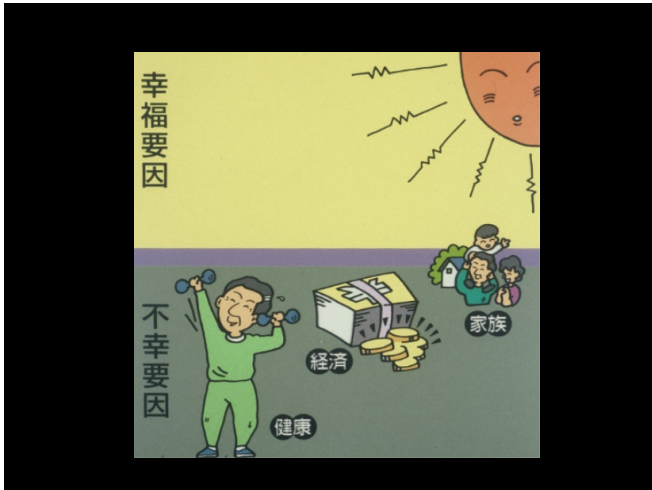
配偶者の有無とモラル



吉谷野 (1992)

4. 関連要因の意味

幸福要因と不幸要因

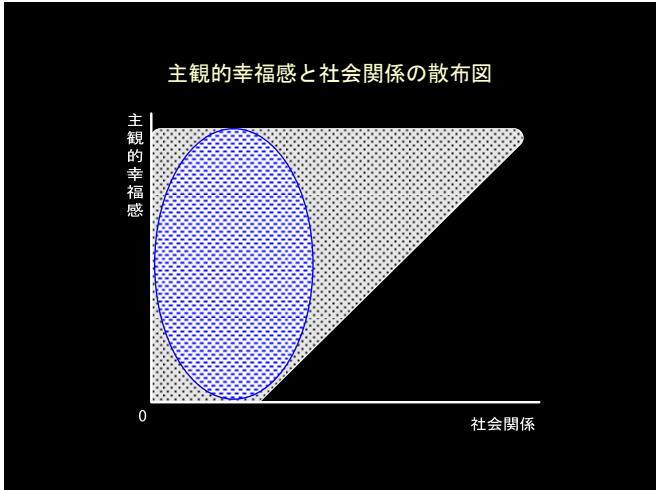
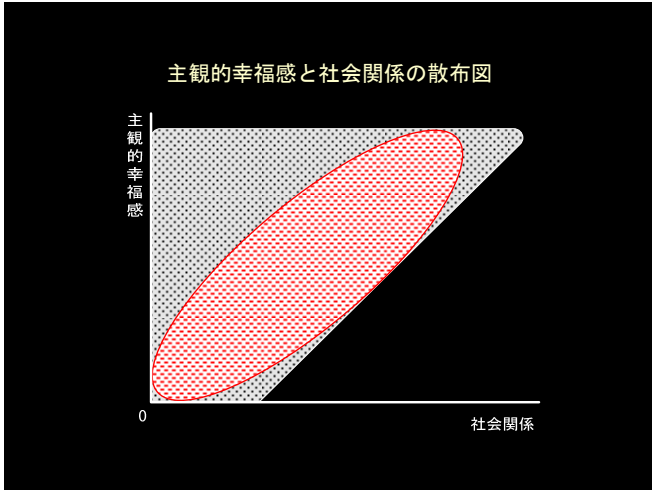
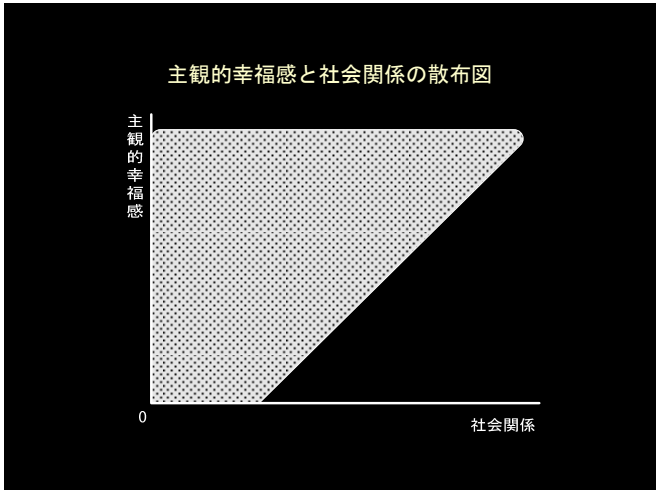


4. 関連要因の意味

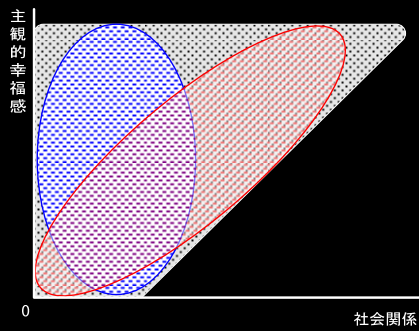
幸福要因と不幸要因
不幸要因の共通性と幸福要因の多様性

4. 関連要因の意味

幸福要因と不幸要因
不幸要因の共通性と幸福要因の多様性
生活様式の嗜好を組み込んだ分析



主観的幸福感と社会関係の散布図



4. 関連要因の意味

幸福要因と不幸要因

不幸要因の共通性と幸福要因の多様性

生活様式の選好を組み込んだ分析

主観的幸福感は幸福な老いの程度の指標として適切か？

Subjective Well-being

||

主観的幸福感

||

幸福な老いの指標

Subjective Well-being

|| ?

主観的幸福感

||

幸福な老いの指標

Subjective Well-being

|| ?

主観的幸福感

|| ?

幸福な老いの指標

まとめ

幸福な老いの条件を明らかにすることは社会老年学に課された究極の課題

まとめ

幸福な老いの条件を明らかにすることは社会老年学に課された究極の課題

幸福な老いに関する研究は主観的幸福感の測定と要因分析として行われてきた

まとめ

幸福な老いの条件を明らかにすることは社会老年学に課された究極の課題

幸福な老いに関する研究は主観的幸福感の測定と要因分析として行われてきた

これまでの研究で明らかにされたのは、主として不幸要因であって、幸福要因についての解明は不十分

まとめ

豊かな長寿社会において幸福な老いの条件を明らかにすることは、残された重要な研究課題

まとめ

豊かな長寿社会において幸福な老いの条件を明らかにすることは、残された重要な研究課題

豊かな長寿社会においては、人々の生活様式の選好を前提とした検討・分析が必要

まとめ

豊かな長寿社会において幸福な老いの条件を明らかにすることは、残された重要な研究課題

豊かな長寿社会においては、人々の生活様式の選好を前提とした検討・分析が必要

主観的幸福感を幸福な老いの指標とすることは是非も慎重に検討されるべきである

ご静聴ありがとうございました



W. Koyano

教育講演

サクセスフルエイジング

古谷野 亘 (聖学院大学)

